

トランスパーソナル心理学／精神医学会 第十回学術大会

「十周年を迎え、トランスパーソナル心理学の原点を問いなおす」

2009年11月22日(日)～23日(月)

明治大学 駿河台校舎

目次

大会実行委員長挨拶	3
学術大会プログラム	4
個人研究発表 演題	6
会場地図	8
特別対談	9
シンポジウム	10
個人研究発表 抄録	13



□ 大会実行委員長挨拶 □

蛭川 立 (明治大学情報コミュニケーション学部・意識情報学研究所)

トランスパーソナル心理学は、もともと臨床的な色彩の強い分野であり、さらに社会的な運動へと発展していく志向性を持つ分野でもあります。その発祥は、ベトナム戦争期の欧米、とくにアメリカ西海岸を中心とする中産階級の白人文化と切り離して考えることはできません。戦争と救命医療の進歩が臨死体験者を増加させ、西洋文明の行き詰まりの感覚から東洋思想への関心が高まり、禅やヨーガなどの実践が広まり、先住民文化の再評価とカウンターカルチャーはサイケデリックスの使用と結びついていきます。

その過程で彼[女]らが体験した、さまざまな変性意識状態や超心理現象は、西洋で心理学が科学として確立していく過程で、陰の部分として周縁化されてきたものでした。しかし、それらを扱うことができる総合的な心理学があらためて求められてきたとき、形成されていったのがトランスパーソナル心理学だったといえるでしょう。

それが文化的な文脈の異なる80年代以降の日本に輸入されたとき、その原点がぼやけてしまったという感は否めません。それから20年以上の時間をかけて、トランスパーソナルという言葉自体はカタカナ語としては徐々に定着してきましたが、かならずしも学術的な研究が盛んになってきたとは言いがたい状況にあります。そして一方では単純な癒しブームや、玉石混淆のスピリチュアル文化と混同されたり、あるいは世直し運動の道具として、その本質がよく理解されないまま安易に名前だけが利用されてきたということも少なくありません。

私は、トランスパーソナル心理学というディシプリンは、もっと特殊で先鋭的な問題を扱う分野であると考えています。たとえば、臨死体験や祈祷による病気治療のような、超心理学と重複するような現象、あるいは、サイケデリック体験やクンダリーニー現象など、現代の日本ではそれらを経験する人々自体が少数であるがゆえにあまり問題にされていないけれども、じつは時代や文化を超えた普遍的な、それゆえ人類全体にとって本質的な問題をはらんだ現象、しかし他の心理学の分野では扱うことのできない現象が存在すること、それがトランスパーソナル心理学が存在し、必要とされる所以であると考えます。

本学会の年次大会も10周年を迎える節目の年でもあり、もう一度原点に戻って、なぜトランスパーソナル心理学という分野が必要なのか、それに何ができるのか(あるいは、必要ないとしたら代わりに何が必要か)ということ、皆さんと一緒に考えたいと思っています。

□ 学術大会プログラム □

11月22日(日) 学術大会1日目 アカデミーコモン9階 309A教室

09:00～ 受付

09:15～ 開会

堀 エリカ(総合司会／立教大学)

09:20～ 開会挨拶

蛭川 立(大会実行委員長／明治大学)

「10周年を迎え、トランスパーソナル心理学の原点を問いなおす」

10:00～ 休憩

10:15～ 個人研究発表(1)

座長 安藤 治(国立クリニック)

11:55～ 休憩

12:00～ 理事会

13:50～ 個人研究発表(2)

座長 合田 秀行(日本大学)

14:40～ 休憩

15:00～ 特別対談

鏡 リュウジ(平安女学院大学) × 蛭川 立(明治大学)

「共時性のコスモロジー」

17:30 終了

18:00～ 懇親会 アカデミーコモン1階 カフェ・パンセ

(別料金/予約あるいは当日受付)

* 1日目と会場が異なります、ご注意ください。

11月23日(月・祝) 学術大会2日目 リバティータワー8階 1083教室*	
09:00～	受付
09:15～	開会 堀 エリカ(総合司会／立教大学)
09:30～	個人研究発表(3) 座長 田中 彰吾(東海大学)
10:35～	休憩
10:50～	個人研究発表(4) 座長 安藤 治(国立クリニック)
11:40～	休憩
13:00～	総会
13:30～	休憩
13:45～	特別シンポジウム「超心理学とトランスパーソナル心理学」 座長 蛭川 立(明治大学) 石川 幹人(明治大学) 「超心理学の現状と展望」 小久保 秀之(国際総合研究機構／明治大学) 「時間感覚と研究感覚」 渡辺 恒夫(東邦大学) 「宇宙のアノマリー(変則事象)としての自己と他者」
16:30～	休憩
16:45～	個人発表(5) 座長 石川 勇一(相模女子大学)
18:00～	休憩
18:15～	閉会の辞
18:30	終了

□ 個人研究発表演題 □

○11月22日(日)学術大会1日目

10:15ー 個人研究発表(1)(発表は15分強、質疑応答は10分弱)

座長 安藤 治(国立クリニック)

・市川きみえ(立命館大学)

「出産体験における神秘性」

・岩崎美香(明治大学)

「日本人の臨死体験 ー一人称の死体験ー」

・里村生英(エリザベト音楽大学)

「音楽死生学臨床実践における死の捉え方、患者観、音楽提供の意図
ー臨死期の患者へのスピリチュアル・サポートとしての観点からー」

・寺西光輝(日本福祉大学)

「老子における『道』と変容のプロセス」

13:50ー 個人研究発表(2)

座長 合田秀行(日本大学)

・岡野利津子(学習院大学)

「プロティノスの哲学体系と神秘体験」

・巻口勇一郎(常葉学園短大)

「クダリニーの目覚め(クダリニー症候群)とその可能性について
ー生理、心理、文化、社会ー」

○11月23日(月・祝)学術大会2日目

09:20ー 個人研究発表(3)

座長 田中彰吾(東海大学)

- ・渡辺恒夫(東邦大学)

「宗教的世界観や精神病理的体験を自我体験・独我論的体験の現象学によって解明する」

- ・林 貴啓(立命館大学)

「『問い』と『答え』の見地

ースピリチュアリティを理解するためのひとつの補助線ー」

- ・久保隆司(アライアント国際大学)

「ポスト・トランスパーソナル心理学としてのソマティック心理学ーケン・ウィルバーのインテグラル理論の観点からー」

10:50ー 個人研究発表(4)

座長 安藤 治(国立クリニック)

- ・村上祐介(関西大学大学)

「子どものスピリチュアリティに関する基礎的研究(2)ー自由記述に焦点をあててー」

- ・塚崎直樹(つかさき医院)

「公案の意味と可能性」

16:45ー 個人研究発表(5)

座長 石川勇一(相模女子大学)

- ・風間明日香(京都大学)

「退行療法から生命(いのち)をみつめるー生まれ変わりの「体験」を通してー」

- ・竹重 幸(名古屋大学)

「現代青年の生きづらさに関する人間科学的ー考察」

- ・井上博登(REIMEI)

「トランスパーソナル心理学におけるGDVの現状と可能性」

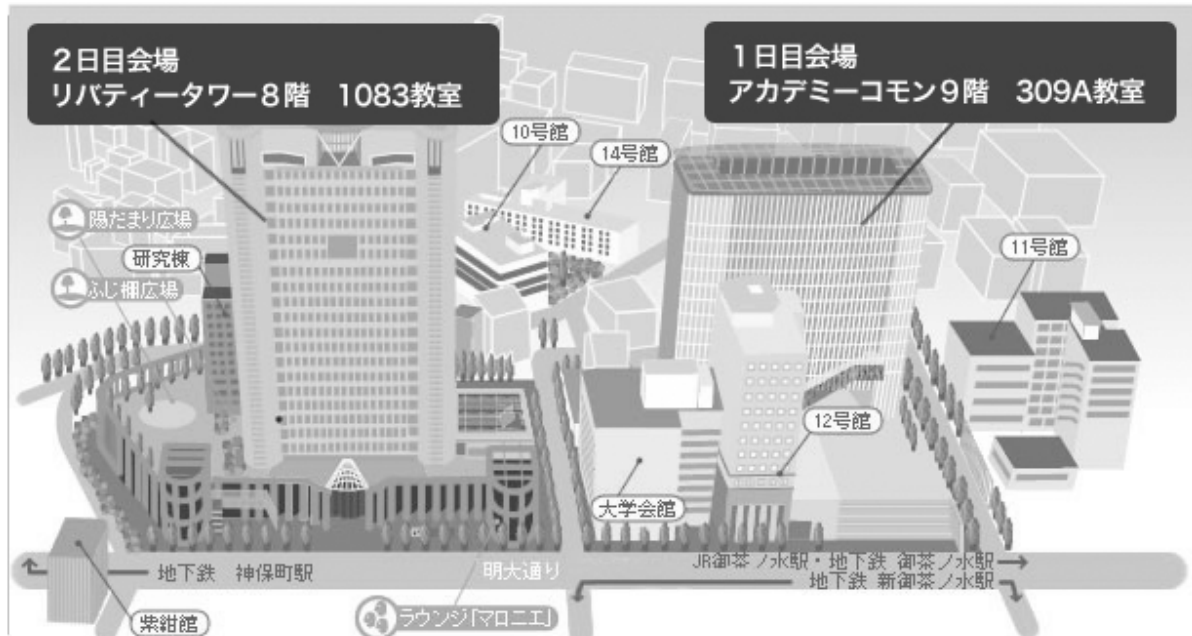
□ 会場地図 □



■JR中央線・総武線、東京メトロ丸ノ内線／御茶ノ水駅 下車徒歩3分

■東京メトロ千代田線／新御茶ノ水駅 下車徒歩5分

■都営地下鉄三田線・新宿線、東京メトロ半蔵門線／神保町駅 下車徒歩5分



□ 特別対談 □

「共時性のコスモロジー」

鏡 リュウジ(平安女学院大学) × 蛭川 立(明治大学)

占星術は数千年の蓄積を持った統計学だといわれることがあるが、じっさいには統計学的方法論が正確に整備されてきたのは、たかだがここ百年ばかりのことにすぎない。そして、たとえば「生まれ星座」とパーソナリティとの関係という、現在もっともポピュラーに信じられている相関は、すでにアイゼンクラによる統計的研究によって否定されている。

いわゆる十二星座占いは、二十世紀に入ってから一般的になったもので、それだけを西洋占星術とみなすわけにはいかないとはいえ、占星術は、けっきょく科学以前の迷信だったのだろうか。しかし、統計的に均してしまうと埋没しまうのにもかかわらず、それでもある重要な瞬間にぴたりと当たる(ように思われる)ことがある。占星術師たちは、これを「占星術的瞬間」と呼ぶ。それでは、なぜその特別な瞬間には「当たる」のだろうか。

因果性の原理にもとづいて占星術のメカニズムを考えようとする、たとえば惑星の重力が地球上の人間に影響を及ぼしている、といった発想になるのだが、月以外の天体の場合、物理学的にみてそのような可能性は低い。やはり占いが当たったように感じるのも、偶然であり、一種の関係妄想なのだろうか。

とはいえ、たとえそうであったとしても、それは意味のある偶然であり、むしろ共時性(シンクロニシティ)という視点からみれば、ある世界観の枠組みが用意されるとき、そのイーミックな意味体系の中で、天体の配置と人間の配置との間に、非因果的な照応が起こる瞬間がある、と解釈できる。つまり、これはユング心理学的な問題であると同時に、記号論的、構造人類学的なコスモロジーの問題としても捉えなおさなければならない。

サイン(シーニュ)とは「宮」であり「記号」という意味でもある。コンステレーションとは「星座」であり「布置」という意味でもある。レヴィ=ストロースによる神話の構造分析から表現を借りるなら、星座(コンステレーション)の中で人間が動いているのではなく、人間の中で布置(コンステレーション)が一当人にも意識されずに一動しているのだ、といえるだろう。

この、外宇宙と内宇宙の照応という視点から、西洋占星術だけでなく、広く占術というもののコスモロジーについて再考してみたい。(文:蛭川)

□ シンポジウム □

超心理学の現状と展望

石川 幹人(明治大学)

透視やテレパシー、予知などの超能力現象は、100年以上にわたって、超心理学の研究対象として研究がつづけられてきた。今日、科学の進展とともに分析技術がますます精緻化し、有無をいわずデータが積み上げられてきている。それでもなお、その事実を多くの人々が認識するには至っていない。

今回は、超心理学が明らかにしてきた超能力現象の心理学的な諸性質(下降効果、ヒツジ・ヤギ効果、実験者効果など)を解説する。また超能力現象の効果が小さいことから、現象の再現に手間と統計的なテクニックが必要な問題を指摘したい。将来的には、再現性を高め、通常の科学者が自ら体験でき、この分野への参入を促す方法の開発が望まれる。それに向けた試みの例も紹介する。

時間感覚と研究感覚

小久保 秀之 (国際総合研究機構・明治大学)*

時間や空間の概念を考えようとすると、相対性理論や量子力学などの話になりがちである。それはそれで面白いが、ここでは日常的な問題、あるいは実験・実践現場の問題として検討する。

植物時間と動物時間

私も含めて多くの人は、動物時間は植物時間より速いと考えて生活している。しかし、我々も生き物である限り、時間がかかる事柄はどうしたって時間がかかる。たとえば、我々の肉体を構成する細胞が新陳代謝で入れ替わるのに半年かかるといわれている。我々の肉体の根幹は植物時間並みの速度で変化する。たぶん、意識や心も植物時間でゆっくり変化するだろう。植物時間の速さで意識や心の変化を考えれば、今まで気がつかなかった事が見えてくるかもしれない。

長時間測定

現在、当研究室では、いわゆる手かざしヒーリングの効果をバイオフィトン(極微弱生物光)で測定している。輪切りにしたキュウリに30分間ヒーリングし、その後、何もしなかったキュウリと一緒にバイオフィトンを18時間測定するという方法である。この研究を通じて、私は時間や空間の物理概念を変更するよりも、自分の持っている時間や空間の感覚を変更する方が先ではないかと考えるようになった。大半の超心理学実験は、変化が動物時間並みの速さで起こることを前提にしている。しかし、超能力による変化は本質的に植物時間並みの速さで起こるのかもしれない。もしそうなら、実験の時間デザインを変更すれば測定できるようにはずだ。

物理学と超能力

ヒーリングパワー(あるいは効果)の大きさをJとす

ると、バイオフィトン測定法の場合、J値は次の式で表される。

$$J = \ln(IE/IC)$$

IE/ICは、それぞれ実験試料・対照試料の発光強度である。重要なのは、超能力の大きさを物理量だけで記述できるという点だ。左辺の世界(超能力や心の世界)と右辺の世界(物理学で記述可能な世界)は、実に簡単な数式で結ばれている。将来、ESP系の現象でも何らかの関係式が作られるようになるだろう。

研究感覚

超能力が不思議な性質をもっているのは確かだが、その一方で、J値で記述できるような、わかりやすい単純な性質もあると期待できる。たぶん、超能力と呼ばれる現象は普通の科学の考え方で研究できるはずだ。そう思って現代超心理学を眺めると、研究の方向性に根本的な間違いがあったがために袋小路に入ってしまった研究を見出すことができる。その典型例がスプーン曲げ実験である。スプーン曲げ実験では「条件の厳密化＝課題の困難化」であった。課題を容易化して現象が起こりやすくなる方向に舵を切れば、スプーン曲げ研究は前進できるだろう。

むすび

超能力の不思議な性質を説明するために物理学を変更するという方向もあるが、その一方で、我々の時間感覚や研究感覚を大胆に変えてみることも有益だろう。

* 263-0051 千葉市稲毛区園生町1108-2園生ビル40A
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/iri>
 kokubo@a-iri.org, nbb03272@nifty.ne.jp

宇宙のアノマリー(変則事象)としての自己と他者

渡辺 恒夫 (東邦大学)

アノマリー(変則事象)に関する科学研究に超心理学があるが、最大のアノマリーは宇宙には人間一般ではなく自己と他者が存在することである。当然視される余り気づかれていないその意味に気づく体験を、自我体験・独我論的体験という(渡辺,2009)。これら体験の事例を紹介・検討することで、その意味を解明し、世界モデルの転換を促す。

(1) 自我体験

SF作家レムは、『完全なる真空』の中で「形而上学的驚愕」について論じている。特定の遺伝子型を備えた特定の物理的存在であることが「私」の存在の条件であるという自然科学的な世界観から出発しながら、ではなぜ、何億という「特定の遺伝子型を備えた特定の物理的存在」のうち、「この存在」が「私」なのかという疑問に突き当たって、答えを見つけられずに驚愕する体験である。つまり、人間一般ではなく私が存在することの気づきが自我体験である。意識科学では「意識の超難問」と呼ばれ、その有意味性を巡って論争がある(三浦,2001,2006; 渡辺,2002)。他に、生物学者ジェニングスと神経科学者エックルスの事例を紹介・検討する。

(2) 独我論的体験

自己が存在すればそれ以外は他者として指定されるので、人間一般でなく自己と他者が存在

することになる。この体験が独我論的体験だ。ここでは建築家ハーディングを取り上げる。「私には頭がないとわかった日こそ、私の生れ変わった日であった。……/したがって、二種類の人間、まったく異なる二つの人種が存在することになる。一方は、明らかに肩の上に頭(私が「頭」というのは、種種の穴のある、毛の生えた八インチ球のことだが)を載せている人種で、その事例は無数にある。それに対して他方は、明らかに肩の上にそんなものを載せてはいない人種で、その事例はたった一つだ。私は今まで、この重大な相違を見落としていたのだ！」(『頭のない私』)しかし彼は独我論者の道を歩まず、「夢頭道」を唱えて同調者5桁を数え、頭の無い私の自己と頭の無いあなたの自己とは、「無」であるから一つであるという、トランスパーソナル?な世界観に到達する。

(3) 可能世界における私の集合としての人間一般

あなた(他者A)にも頭がないと想像するとき、私は自己がAであるような世界を想像している。他者は可能世界における私であり、人間とは可能世界における私の集合として定義される。夢も可能世界であり、無数の可能世界が次々に現実化するという世界モデルが出来上る。物理学的にはこれは中込照明のモナド論(『唯心論物理学の誕生』)で解釈可能かもしれない。

□ 個人研究発表 抄録 □

出産体験における神秘性

市川 きみえ（立命館大学大学院応用人間科学研究科、助産師）

WHOの「健康の定義」において、従来の定義に「スピリチュアル(spiritual)な状態」を付け加え改めようという提案がなされたが、1999年の総会において討議の議題から外された。

しかし、WHOが1985年に行った出産科学技術の勧告は、医療化された出産が非人間的なものになることを危惧し、妊婦とその家族が中心となる人間味溢れるお産を世界中に取り戻すために、出産ケアを「医学」モデルだけではなく、「社会」モデルと補い合い最高のものにすることを目的としてなされたものである。この社会モデルとは、出産を生物社会的プロセスとして捉え、出産は精神のおよび霊的な要素と一体となった生物学的な事象であり、本来女性的、直感的、性的、霊的なものであるという見解である。

例えば、ミシェル・オダンは、「宗教的本能、つまり時間と空間を越えて、何か普遍的なものに属していると感じる世界観は、脳の最も古い構造、つまり、プライマル・ブレインの働きによるもので、それは普遍的で、どの文化にも存在する。」「神秘的靈感による体験は、人の健康の起源に関与し、出産の生理的变化も宗教的感覚が頂点に達する状況のひとつである。」と言う。つまり、神秘的靈感による出産体験は、健康の源ともなりえるということである。

そして、アブラハム・マスローは、至高体験について、「超越的な恍惚感」といった表現をして

おり、「女性の場合、悟りや啓示や洞察といった偉大な神秘的経験や、宗教経験を体験しやすいような仕方子どもを産むのが一番よい。」と述べている。

私は、助産師として、地域の診療所で自然分娩の推進を目指して実践活動を行なっているが、その中で実感することは、自然の流れに身を委ね、自然の摂理にかなった出産は、母子の愛着が早期に形成され、一般社会で問題視されているように、母親達からマタニティブルーや、産後うつ、育児不安などのサポートを必要とされることは少ない。

逆に、自然出産の場合では、母親達から、受胎・妊娠・出産の経過をとおして思いがけずに起こった神秘的体験について、数々の証言を耳にする。その内容は、出産日時や受胎のタイミングの神秘・妊娠中の夢・出産の至高体験・兄姉による胎内や誕生の記憶、弟妹の受胎や誕生の予言・誕生と親族の死との間・出産に関わる者とのつながりなどであり、母親達はその神秘的な体験から、授かった命の尊さと家族や先祖のつながりを実感し、我が子を心から愛おしみ育んでいるようだ。

そこで、本研究では、母親達が証言する数々の神秘的な出産体験の実例を紹介し、助産師としての経験から、生命誕生におけるスピリチュアルの重要性を探った。

日本人の臨死体験

ー 一人称の死体験 ー

岩崎 美香 (明治大学 大学院情報コミュニケーション研究科 修士課程)

臨死体験とは、「病気や事故などによる、生物学的、情緒的危機状態をきっかけとして生じる、超越的、神秘的な要素を持つ体験」と定義される。その体験内容は、体から抜け出して自分の肉体を俯瞰する、花畑や川などの光景を目の当たりにする、まばゆい光に包まれる、亡くなった近親者、神仏に遭遇するといった要素に特徴づけられている。危機的状態さらされた人が、なぜそのような体験をするのか、はっきりしたメカニズムはわかっていないが、体験者によって、それは非常に鮮明な特有の体験だったと証言される場合が多い。また臨死体験は、終わった後も体験者に心理的・生理的な影響を及ぼし続けることが知られている。

臨死体験研究は主にアメリカで発展し30年余りの研究の蓄積がある。しかし、本発表では、まだ手づかずの感がある日本人の臨死体験について扱い、①日本人の臨死体験、②臨死体験のトランスパーソナル的な効果と一人称的な死生観の変容、といった2つについて述べていきたい。

①では、発表者のインタビュー調査によって得られた日本人の臨死体験についてまず紹介する。そして、臨死体験の内容を旅になぞらえながら、事後効果をも含めた体験のリアリティの本質に迫っていく。

②では、臨死体験者のトランスパーソナル的な視点から生じた死に対する態度の変化と、ガンから生還した患者のそれを比較する。そのことによって臨死体験が一人称的な死生観にどのような影響を及ぼすかを浮き彫りにしていく。

さらに、臨死体験が伝統社会の中に見られる円環的な時間構造を持つ死生観と、臨死体験者の死生観との類似性を指摘。現代の直線的な時間軸の中で形成された死生観に取り囲まれる中で、臨死体験について考える意義についても触れていきたい。

音楽死生学臨床実践における死の捉え方、患者観、音楽提供の意図

ー 臨死期の患者へのスピリチュアル・サポートとしての観点から ー

里村 生英 (エリザベト音楽大学)

人生というものが、その時々に出合う環境、人間、そして、超越的な存在との関係の中で、「自分らしさ」というものを発掘し、身につけ、そして磨いていく旅路であるならば、人生の最後の時期にも「自分らしくある」ということは、人生を生き抜いていくすべての人にとってのテーマであり、願いではないだろうか。もしそうであるならば、人生の最後の時期を過ごしている人(患者)が、その人の人生の満了・完成にむかって歩むことのできるように、最後の時期も、その存在・いのちを支えること、すなわち、スピリチュアルな視点でのサポートは欠かせないものである。

ところで、現代の死生学に対する関心は、一つには、死に臨む人々、また死別の悲しみに直面している人々へのケアに携わる人々から生じている。特に、日本のターミナル医療においては、近年、従来の治療中心の医療から生活の質(QOL)を高めるケア中心の医療に移行してきたことと相俟って、スピリチュアル・ケアの必要性が問われ、スピリチュアリティやスピリチュアル・ペインの概念探究、あるいは、スピリチュアル・ケアの本質についての研究が、入念に行なわれてきた。そして現在では、スピリチュアル・ケア臨床実践の集積、体系化、及び、検証を目指す時期に入ったとされている。

一方、音や音楽による癒しの効果は、今や日本でも一般的に受け入れられるようになり、日本のホスピス・緩和ケア病棟などは、療法的な音楽利用を広く取り上げるようになってきている。日本の臨床家たちの中には、音楽による患者の深いレ

ヴェルへの働きかけー魂の慰め、存在の有意味感、永遠への想い、希望の支えーに、スピリチュアル・ケアと音楽の療法的使用との関係を見出している者もいる。

しかしながら、現在の日本では、死にかかわりのあるテーマや、死に逝く過程とそのケアの分野に、音楽からアプローチする研究ー音楽死生学研究ーはあまり行なわれていない。さらに、死に逝く過程とそのケアの分野に特化した、音・音楽の使用原理についてもまだ理論的な構築が為されておらず、具体的方法論の開発が待たれるところである。

そこで本発表では、アメリカで既に36年の実績を持つ、the Chalice of Repose Projectによる音楽死生学臨床実践の原理を通して、臨死期の患者へ音楽を提供することの死生学的視点を明らかにすることを目的としている。そのために、死生学臨床実践の概念枠となる、臨死期の患者、死、及びケアの捉え方、そして、音楽提供のスピリチュアルな意図について言及したい。これらの探究を通して、人生の最期に、音楽を適切に処方しながら死に逝く患者に寄り添うということが、医療や看護の現場にとってのスピリチュアル・ケアの一方法論として可能性があるというだけでなく、死にかかわる新たな文化の創造・運動という可能性も含んでいることを示唆できればと願っている。

老子における「道」と変容のプロセス

寺西 光輝（日本福祉大学）

ユングが中国の「道」に心理学的意味を見出して以来、トランスパーソナル心理学の分野においても『老子』は往々にして言及されてきた。また近年ではアーノルド・ミンデル等によって老荘思想の心理療法あるいはボディワークとしての実践的な価値が見出されるに至っていることは周知の通りである。伝統的な中国学がそこに体験性が内在することは認めつつも、あくまでもそれを哲学的・文献学的に捉えるのに対して、これらの解釈や実践は、よりその本質部分を捉えているとも言えるだろう。ただし、これらにおいて『老子』の思想は、往々にして断片的に引用されるのみであり、トランスパーソナルな視点からその実践の様相が詳細に解明されるには至っていない。

そこで本発表ではまず、宇宙に遍在する「道」の法則に順って意識を変容させていく、老子の実践のプロセスが如何なるものであるかを明らかにする。それは、作為的なはたらきを鎮めたところに顕れる宇宙の流れに順って、「万物」＝意識の根源へと向かい、最終的に「一」なる領域へ到達した後、再度区別・対立の「万物」の世界へ戻るものである。また、このようにして次第に自己の領域を広げていく螺旋的なプロセスの中には、対立物を統合しつつ、実践者が心身に流れるエネルギーを純化して、それを再度従来に対立物へわき起こるようにさせるという実践が内在していることを明らかにしたい。

さらに本発表では、こうした実践があくまでも人間の身体という生理的な基盤に基づいて為されるものであることに注目する。『老子』は単なる哲学書というわけでも、精神修養を説いた書というわけでもなく、そこには、むしろ一種の養生の実践ともとれる面が存在する。そこで、上述した道の実践過程を、具体的な生体の諸機能に則して考えてみたい。東洋の瞑想・修行の心身論的意味については、すでに湯浅泰雄氏の生理心理学・心身医学等を用いたすぐれた考察があり、本発表ではそうした立場をもふまえつつ、老子の説く宇宙＝意識や、その変容のプロセスが、如何なる生理的基盤やその働きに対応しているのかについて言及するつもりである。

プロティノスの哲学体系と神秘体験

岡野 利津子 (学習院大学)

新プラトン主義の創始者で西洋神秘主義哲学の源流とも言えるプロティノス(205-270)の体系では、物質的・感覚的なこの世界(感性界)をつくっているのは魂であり、更に魂をつくっているのはヌース(叡智)であり、ヌースをつくっているのは一者である。一者は万物の始原で、すべての「存在」と「認識」とを超えており、無限・無限定・無形である。この一者から一者を振り返って観る働きが生じるところに、観る作用と観られる対象という二重性が発生し、観る作用の側に「認識」が、観られる対象の側に「存在」が生じる。この、自己自身を観る働きがヌースであり、これは一者の内容が「直知」という仕方限定されて顕現したものだと言える。同様に、魂はヌースの内容が霊的(つまり魂独自の仕方)で限定され、顕現したもので、この感性界は、ヌースや魂の内容が時間・空間において物質的な仕方限定され、顕現したものだと言える。こうして、一者、ヌース(叡智界)、魂、物質(感性界)という段階が生じるのであり、それぞれの次元が、それを観る(見る)意識界でもある。そして、一者からの万物の流出は、一(差異のないもの)から多(差異のあるもの)への分化・展開として見るができる。物質的な次元では、すべての存在が個々に分離して個物となり、ここにおいて主観と客観とは互に独立する。だが、それ以前の領域では、すべてが互に直接的な繋がりを有している。

我々は一者に直知的、霊的、物質的な限定が付け加わって存在しているのであるから、我々が一者に帰るには、それらの限定を捨てなくてはならない。つまり限定されたものとして成り立っている自己を否定し、一切を捨て去らなくてはならない(それは、この個我の滅却を意味する)。また、多様なものへと分散した現在の我々の意識と存在は、一者の自己意識(超直知的な自己直観)が主観・客観へと分化・展開したものであるから、我々は自己意識の集中・統一において、一者へと帰一し得る。一者は我々の自己のいわば原初状態だという意味では我々に内在しているが、我々の限定された自己の限界を超えているという意味では我々を超越している。

我々は肉体を持って生きている限り、一者との合一体験に至っても、そこに永遠に留まるわけではなく、やがて再び日常の意識へと戻ってくる。但し、この意識の降下には意義がある。なぜなら、この時我々は、一者が自己を発現する力と共に降りてくるからである。我々の新たな自己形成は、一者そのものの力の現われとして行われる。そこで、一者へと帰還する前と後とでは、我々のあり方に飛躍的な変容が起こることになる。プロティノスの哲学からは、個と個を超えた次元とを廻る哲学的な理論を提供することができる。

クンダリニーの目覚め(クンダリニー症候群)とその可能性について

ー 生理、心理、文化、社会 ー

The Potential of the Kundalini Arousal and the Physio-Kundalini Syndrome

巻口 勇一郎 (常葉学園短大准教授、日本大学非常勤講師)

本発表ではスピリチュアルな体験のなかで今日広く知られはじめている、仙骨付近から沸きあがる確実な力＝「クンダリニー」の生理・心理(危険性)、文化社会的位置づけ(可能性)について、先行研究や体験談等を参考にしながら考察する。

クンダリニーはヒンドゥーの伝統において脊椎の基底部に隠されまた隠され引き籠もって半ば休眠し、やがて目覚めて昇昇する、とぐるを3回半巻く根源的エネルギーの名である。尾てい骨付近(Mūlādhāra)で眠るこの蛇はシャクティ女神(大母)の象徴であり、脳と頭蓋のシュニーヤという空洞(Sahasrāra)で待つシヴァのもとに帰還合一するという神話のなかで解釈されてきた。しかし、これは文学、思想・信仰、あるいは対象なき知覚としての純然たる幻覚ではなく、正当な(＝廃れない)思想や宗教の共通原因となっている根源エネルギーの表現であり、健常者ならば同じような内容(節度)を備えていると考えられる(巻口 『トランスパーソナル心理学・精神医学』8巻 2008)。

クンダリニー上昇に伴う感覚は、例えば次のように表現できる。「消防ホースを仙骨に繋がれ、そこからコック全開で頭頂に向け全開で放水されている感覚、背骨ラインが裂けてあの否、マグマがほとぼしりである感覚」。あのと形容するのはそれが懐かしい集合的記憶に思えるからである。デュルケムもこの表現を用いている。クンダリニーが蛇に象徴される理由は、背骨を太い蛇が

這いあがっていく、その鱗が擦れざらざらする感覚や音が生ずるからである。

クンダリニー症候群の愁訴内容について、エビデンスとして十分とはいえないが、ケースの蓄積と共に、今日徐々に全体像が明らかになってきている。先行文献等に照らし、準備がない尚早(premature)な覚醒や症状(PKA, PKS)の一部を列挙する。グレイソンはPhysio-Kundalini Syndrome Indexを作成し、被験者に調査を行っている。PKSの愁訴内容の一部を列挙する。エネルギー突き上げが、理由なく奇妙な姿勢になり動けなくなることや、未知のヨガの姿勢、舞踊を自動的に生み出すことがある。その他、基礎体温上昇、脈動振動感、蟻走感、痒み、擬似精神病、他人や無生物を焼き影響を及ぼすほどの熱く冷たいエネルギーが渦巻き流れる感覚(とその部分の発疹)、法悦・恍惚感など、人によって様々である。クンダリニー上昇は、内容から考えて霊的な緊急事態に相当するといえる。

短時間の発表でここまで行うには無理があるかもしれないが、最後に本発表では、クンダリニー上昇が、日常生活をどのように変化させ、また社会学的にどのような機能を果たしうるのか、デュルケムの「集合的沸騰」理論からヒントを得ながら考察したい。

* サンスクリット語のローマナイズは梵英事典(M. Monier-Williams)による。

宗教的世界観や精神病理的体験を 自我体験・独我論的体験の現象学によって解明する

渡辺 恒夫 (東邦大学)

現象学的精神医学では 病理的体験が自生的現象学的還元と見なされる〔1〕。演者による自我体験・独我論的体験についての調査研究は〔2〕、自生的現象学的還元が子供の頃に誰にでも起こる可能性を示唆する。

【自我体験例】「6歳か7歳くらいの頃、ある晴れた日の正午ちょっと前、二階の部屋にいて、窓からさしこむ日差しをぼーっと見ている時に、“私はどうして私なんだろう、私はどうしてここにいるんだろう”と思った。」【独我論的体験例】「小学校低学年時:授業を受けているときなど自分一人で物が考えられる時ふと思ったりした。周りの人達は人間なのか 今こうして考えることをしているのは自分一人だけだろうか。」20～30%の大学生が自我体験を9～12歳に定位して報告し、5～6%が独我論的体験を7～10歳として報告する。木村〔3〕の自明性概念を導入すれば、自我体験は「個別的特定の同一的存在として自己の自明性の破れ」、独我論的体験は「類的存在としての自己の自明性の破れ」として現象学的に定義される。アスペルガー症候群にも独我論的体験に算入できる体験がある。「私はそれまで〔8歳〕、他の子どもたちと自分とが同じカテゴリーに属するなんて、思ってもみませんでした。なぜなら他の子どもたちには背中があるからです。」〔4〕

宗教的神秘的とされる体験や世界観もまた、自我体験・独我論的体験の諸特徴がダイナミッ

クに相互作用し合って形成されるものとして現象学的に解明できる。たとえば—

①化身教義。7歳にして自分が神であることに気づいた少女のエピソード(R.ヒューズの海洋小説)に基づき、自我体験から独我論的体験への展開として解明される。

②輪廻転生。神経科学者エックルス、幻想作家稲垣足穂、オウム真理教元信者の半自伝的テキストを元に、自我体験の諸特徴のダイナミックな相互作用として解明される。

③梵我一如。物理学者シュレディンガーの自伝を元に、自我体験・独我論的体験の諸特徴の相互作用として解明される。

自明性の彼方における自己の存在様式として、①を「唯一者」、②と③を「一者」と名づけると、共にトランスパーソナルな存在様式といえる。心理学調査と現象学的方法によってトランスパーソナル世界観の核心が解明可能であることを、本発表では示したい。

<文献>〔1〕タトシアン『現象学と精神医学』みすず書房、1998。〔2〕渡辺恒夫『自我体験と独我論的体験』北大路書房、2009。〔3〕木村敏『異常の構造』講談社、1973。〔4〕ニキ・リンコ「訳者あとがき」、グニラ・ガーランド『ずっと「普通」になりたかった』(pp.281-286)花風社、2000。

「問い」と「答え」の見地

ー スピリチュアリティ理解するためのひとつの補助線 ー

林 貴啓 (立命館大学非常勤講師)

直接の組織宗教へのかかわりを前提とせず、生死の問題や自己の存在理由を語り、探求することを可能にするスピリチュアリティの見地は、今後ますます意義深いものになってゆくことが期待される。だがその一方で、世の「スピリチュアル・ブーム」のため、一般の人々が「スピリチュアル」と聞いてこちらを連想するような事態が生じている。安易な混同の危険も高まっているといえよう。また、こうした「スピリチュアル」に対する批判言説も登場し、影響力を持ちつつある。こうした状況のなかでスピリチュアリティになお希望を見いだしてゆこうとするのであれば、概念そのものへの批判的反省と、適切な分節化を踏まえた視座の確立が欠かせないであろう。スピリチュアル／スピリチュアリティのネガティブな形態に対しても適切に応答できるような見地が求められるのである。

これまでも、広範に用いられるスピリチュアリティ概念を整理し、分節化しようとする企ては存した。発表者もかねてから、「問い／答え」の位相を区別するアプローチを提案してきた。今発表では、この見地をさらに推し進めたい。「問い／答え」を単に段階的な区別とみるのではなく、スピリチュアリティにかかわる事象の、共時的に成り立つ二つの次元として理解するアプローチを提唱するのである。

問いがスピリチュアルであるとは、生死の問題や自己の存在意義といった人生の根本的・究極的な問題に、実存的に向き合おうという姿勢が存するということだ。それに対して答えがスピリチュアルであるとは、神仏や神霊にせよ見えない世界にせよ深層の自己にせよ、何らかの超越的なものの存在を肯定すること、あるいはこれらと体験的に接するということだ。この2つを理論的には独立に成り立つものとして、2本の座標軸で表現すると4つの象限が得られる。「問いも答えもスピリチュアル」「問いがスピリチュアル」「答えがスピリチュアル」という3つの象限の関係を探つてゆくことで、「スピリチュアル」「スピリチュアリティ」の名で呼ばれる諸事象の共通性の意味や、世の「スピリチュアル・ブーム」とそれに対する批判言説の問題点、「スピリチュアリティは人間に普遍的なものか？」という問いへの一定の展望、「宗教はスピリチュアリティに含まれるのか？」という問いに対する一つの示唆など、さまざまな展望が開かれるはずである。これを、わが国におけるスピリチュアリティのしかるべき発展のための礎とすることが発表者の目的である。

ポスト・トランスパーソナル心理学としてのソマティック心理学

ー ケン・ウィルバーのインテグラル理論の観点から ー

久保 隆司 (アライアント国際大学)

近年、アメリカではトランスパーソナル心理学は目立たない存在になっている。その理由はいくつかあろう。たとえば、スピリチュアリティや意識の発達に関わる研究が、全くトランスパーソナル学の占有ではないこと。マイナーな分野の研究に特化することで、社会的な意義も希薄となり、極めて一人称的な一部マニアのための学問になったことからくる閉塞感。この分野での最も著名な思想家で、大きなビジョンを描けるケン・ウィルバーの離脱。新しい人材の不足。そして時代の変化、等。

一方、日本においては、先人の苦勞もあって、トランスパーソナルという言葉が、ある程度知られるようになったことは喜ばしい。しかしその反面、学問としての境界線が曖昧な側面もあってか、必ずしも肯定的な評価ばかりでは無いようである。また欧米では、ウィルバーの近年の業績が特に高く評価されているが、日本ではそうでもなく、認識のギャップに驚かされる。さらに、ここ数年の日本におけるスピリチュアリティの流行には、退行的な快樂や稚拙な世迷いごとが非常に多いようである。(少なくとも統合的でない)退行からは、結局、一時の暇つぶし以上のものは何も生まれてこないことは、これまでの歴史が示している。トランスパーソナル学やインテグラル学は、そのことについて積極的に発言する社会的責任を強く感じる。

以上のような流れを踏まえ、21世紀初頭の今、世界中の多くの人々(の意識の進化)にとってのソマティック心理学(身体心理学)の必要性が、脳科学、神経生理学、PTSD研究などとも連携しながら、欧米では着実に増してきている。ソマティック心理学は身体心理学や、身体心理療法とも訳されるが、トランスパーソナル段階へ行くためのベースキャンプともいえるインテグラル段階の心身統合にとって、極めて重要な意味を持つものである。ソマティック心理学の道が、トランスパーソナルの道へとたどり着く道ではないだろうか？ そして必ずしも意識の発達の実践において“トランスパーソナルな世界”に執着する必要は、現在には無いのではないだろうか？

発表者が、アメリカで学んできたウィルバーのインテグラル理論/インテグラル心理学の知見を元に、ソマティックス(身体学)、ソマティック心理学、トランスパーソナル心理学の位置づけの再確認を試みたい。そうすることで、一人称、二人称、三人称の観点と相まって、より全体的(ホリスティック)で、統合的な構図(インテグラル・ヴィジョン)の獲得に少しでも役立つ、新たなる旅たちへのアクションにつながるのではと考える。

子どものスピリチュアリティに関する基礎的研究(2)

ー 自由記述に焦点をあてて ー

村上 祐介 (関西大学大学)

【問題と目的】トランスパーソナル心理学を含む従来の発達観では「段階説」が主流であり、幼少期のトランスパーソナルな体験やスピリチュアリティの現れは、ファンタジーや未熟な思考、前個段階のものに過ぎないと見なされてきた(Armstrong, 1985)。しかし近年では、多くの子どものスピリチュアリティ研究が行われ(Armstrong, 1985; Hart, 2003; Hay & Nye, 2006; Piechowski, 2001)、その存在が認められつつあるが、我が国では子どものスピリチュアリティを体系的に調査した研究は行われていない。そこで本研究では、Childhood Spiritual and Non-Ordinary Experience尺度(以下CSNOES; Nelson & Hart, 2003)を用いて、日本における子どものスピリチュアリティに関する探索的研究を行う。併せて、スピリチュアリティ傾向やパーソナリティ類型との関連についても検討する。

【方法】2009年4月中旬から7月中旬にかけて、18歳から32歳(M=21.06, SD=1.74)までの151名(男性68名、女性76名)の専門学生と大学生に対し質問紙調査を行った。質問紙は(1)フェイスシート(2)日本語版TCI(木島ほか, 1996)(3)日本語版CSNOES(4)STS-R(中村, 2007)から構成される。

【結果】まず日本語版CSNOES全体より、幼少期に何らかのスピリチュアリティ体験をした者は、全体の49%にあたる74名いた。また初体験時の年齢分布から、日本語版CSNOES全体では12-

18歳が最も体験頻度が多いことが明らかになった。初体験時の最少年齢は1歳で、次いで3、4歳という低年齢の回答も得られた。

次に、日本語版CSNOESに関する自由記述を求めたところ、27名(17.9%)から41のエピソードが得られた(複数回答を含む)。パーソナリティ類型ごとに自由記述回答者を分類したところ、調和的発達を特徴とする「創造的(啓発型)」には8名が分類され、他に自己超越の高さを特徴にもつ「無秩序(統合失調型)」、「気分屋(気分循環型)」、「狂信的(妄想性)」には16名が分類されることになった。また、子どもの意識のスペクトル(Armstrong, 1985)と照合すると、超個段階に該当すると思われる体験は2ケースで、下位個レベルに含まれる心霊的知覚(夢、不可視な存在の知覚)に関する記述が多くを占めた。

【考察】約半数の回答者が、子ども時代に何らかのスピリチュアリティ体験をしていることが明らかになったが、自由記述では心霊的知覚に関する体験が多く語られた。今後は質的研究や尺度の見直しを通して、日本の子どものスピリチュアリティをより詳細に明らかにしていくことや、調和的発達と幼少期の体験の統合との関連などを調査する必要がある。

※日本語版CSNOESとSTS、TCIとの関連については当日発表する。

公案の意味と可能性

塚崎 直樹（つかさき医院）

（はじめに）

以前の学会で、公案と心理療法の関連について報告した。その中では、公案と心理療法との間に関連性はないという考えを述べた。しかし、その後の実践の中で、新たな視点を得たので、報告したい。

（治療の基盤となるもの）

精神科の治療を行っているとき、治療者は知らないうちにある種の前提をもうけて、その前提の上で治療を組み立てている。患者が、治療者の設定した前提を踏み外したような言動を行ったとき、治療者は衝撃を受け、自由に対応することができない。そのような混乱を患者の側が察知すると、どのように一時的なつじつま合わせが行われても、長期的には治療がうまくいかなくなってしまう。治療者の設定している前提とは、治療者の人間的器に関するものであって、治療者の器以上の治療はできない。治療者がいかに取り繕っても、患者からは見抜かれてしまうものである。私自身が直面した治療的な限界に触れながら、具体的な事実に触れて検討してみたい。

（公案修行が持つ意味）

次に、私自身の治療の基盤が変化したこと気づいた事例に触れながら、その変化が公案による修行が関連していたことについて述べてみたい。公案修行による変化は、治療技法の変化にあるのではなく、関心を自由に漂わせるという心的な態度に現れていた。言ってみれば、技法

以前の部分に変化を与えていたのだ。では、このような変化は公案修行によってしかなされないのかというとそうではないだろう。治療者として評価されている人々は、何らかの形で、治療基盤を深めていく努力をしていたと考えられる。ユングやフロイトの実践の中に、それらの一端を考えてみたい。

（フランクルの報告）

ユングやフロイトについて触れてみても、それはある意味で想像の段階を越えない。ここで、実際に治療者が自分自身の治療基盤を揺さぶられ、それを変化させていった体験をフランクルの報告の中で見てみたい。それは「生命の樹」の話である。おそらくユングやフロイトも同じような体験の中で、治療基盤を深めていったのだろう。そして、これらのエピソードを検討してみると、それは公案修行ととても似た構造をもっていることに気づく。今回は、そのことの意味を指摘し、禅の修行で使われる公案の可能性について触れてみたい。

退行療法から生命(いのち)をみつめる

ー 生まれ変わりの「体験」を通して ー

風間 明日香 (京都大学大学院 人間・環境学研究科 博士後期課程)

近年の医療技術の発展に伴い、私たちは、医療に対して過度な期待を寄せ、生命を人の力で延ばし得るものと考えようになった。また、遺伝子工学の研究開発も進み、病気の治療のみならず人体改造へと通じるような技術を一層展開している。その一方で、毎日のように虐待、自殺、他殺などの陰惨な事件が頻発している。このように生命の二極化が横行する現代社会において、心理療法に対する需要が増大している。本発表では、非局在的療法の1つである退行療法の実体を明らかにし、その応用可能性を提言したい。

方法として、「過去生ー中間生退行」に該当する退行療法の臨床事例をメタ分析した。

その結果、退行療法は、心身症をはじめ様々な精神的疾患や問題に効果を発揮することが明らかとなった。多くのクライアントが過去の出来事に対する未解決のトラウマを抱え、それを何らかの疾患や問題として顕在化させていた可能性が示唆された。

また、長期間に渡り苦しんできたクライアントが比較的早期に治癒や問題解決に至っており、この療法が身体的・精神的負担のみならず経済的負担さえも軽減し得ることが明らかとなった。

さらに、クライアント全員が国籍や文化にかかわらず、また意識する・しないにかかわらず生まれ変わりを「体験」した結果、自ずと死生観を再構築させていた。なかでも、死の「体験」をしたク

ライアントは、一様に死後の「意識」の継続を報告していた。彼らは、その「体験」を通して大局的視点に立ち、慈愛こそが生きるための源であり、生きることそのものが自分自身の学びであることを理解するに至っていた。

退行療法は、クライアントに気づきをもたらし、そこから内省や自己統合へと導くことにより自己治癒力を向上させる療法であるといえる。そして、この内省や自己統合にこそ、この療法の主眼が置かれていると考えられる。

「生まれ変わり」の真偽は誰にもわからない。しかし、それらの想起がクライアントたちの心身に望ましい影響を与えたことは紛れもない事実である。おそらく、彼らは、自分が誕生や死をも超越した永遠の存在であることに気づき、勇気を得たのかもしれない。

近年、スピリチュアルケアという言葉に頻繁に触れるようになった。窪寺は、これを「特に死の危機に直面して人生の意味、苦難の意味、死後の問題が問われ始めたとき、その解決を人間を超えた超越者や、こころの中の究極的自己に出会う中に見つけ出させるようにするケアである」としているが、退行療法はまさにこのスピリチュアルケアの一環であるといえる。今後、この療法の治療的側面はもとより、教育的側面を応用することにより、生命を尊重した生き方の提唱に役立てることが可能である。

現代青年の生きづらさに関する人間科学的一考察

竹重 幸 (名古屋大学大学院)

1. はじめに

本研究は、現代青少年(広義の青年期:14,5歳-35歳)を対象としてとりあげ、彼らをとる今日の社会、文化、心理、身体など全体的な状況との関連において、彼らの生きかたの特質を実存的な視点から検証している。

近年、いじめや学級崩壊、不登校などの教育的問題に止まらず、非就労者、薬物依存、殺人などの犯罪にいたる社会問題がクローズアップされ、現代青年のありかたが憂慮されている。こうした現状をうけて、青年に関する様々な研究が行われてきたが、社会的側面、または発達的な側面のどちらかに焦点をあてたものが多く、青年の様相や生きかたについて包括的に論じた研究が少ないように思われる。

そこで、人間の存在を要素に分断・分析するのではなく、全体を包括的に把握するという方法(人間科学)で現代青年の様相を確かめたいと考えた。そして、観点変更(世の中のできごとに対するもの見かた、感じかたの根本的な見直し)することを目的としている。

2. 「生きる意味」に対する葛藤

現代人は、何か空虚感や生きる意味の喪失を抱えて生きている。それは、自分らしくありたいと感じていてもそうでない状況が葛藤を生んでいる。たとえば、教育現場で「個」を大切に教育をどれだけ推進しても、同時に「みんなと同じ、みんな仲良く」を尊重する教育が根付いている。

問題は、現代青年たちが「みんなと同じ自分」から降りることができるかどうか、すなわち、自分らしく生きるためには孤独になることを怖れないことである。自己拡散的な適応や他との関係に支配されるのではなく、自分の心ととことんつきあうことによって「気づき」が生まれることを大切にしたいと考える。

さらに、「何か空虚な感じ」に対しては、自己実現しようと求めることを辞めてみることを提案する。何故ならば、個を超えた視点から自己を捉えなおし、自分がしたいことをする人生から自分のなすべきことをする人生へと生きかたを転換することによって本当の「生きる意味」を実感できるのではないかと考えるからである。

3. 現代青年の生きかたの可能性

現代社会では、青年に対する見解が多様化することによって、彼らは表層的に生命力がないような「流されている」イメージだけが一人歩きしている。以前の青年たちと相違することは、明確な指標が喪失されていることであるが、平和で安全、そして豊かな現代社会が彼らの目標を喪失させる原因なのかもしれない。「なんとなく」生きることができる時代になったのである。親にパラサイトする新しい生きかた、労働意欲のない若者の甘えの構造は問題視されているが、親世代の経済格差の問題や、従来の就業構造による新卒の敬遠やアルバイトの増加などの労働市場の変化と切り離して考えることはできない。

さらに周囲をうまく協調することや、「みんなと同じ」であることを美德とする日本独特の習慣と、個性化や差異化を求める新しい産業社会は、現代人が主体的に生きることを困難にさせている。そこで、安心して生きる土壌と自分を肯定してくれる、共感し合える場がいま必要とされるのである。つまりそれは、「いまの状況は彼らのせいではない。」と言ってくれる社会でなければ、また時代に即した観点変更ができなければ彼らが自立する土壌を構築することは不可能である。それとともに、受け身でもなく妥協のない新しい(オルタナティブな)生きかたの選択や自分自身の変容こそが彼らに問われる課題だと考えるのである。

トランスパーソナル心理学におけるGDVの現状と可能性

井上 博登 (REIMEI)

人間の“意識”や“心”に関する実証科学としての研究を進める場合、測定技術というものは、重要である。このとき、考慮すべき内容として、測定時の対象への制約や影響を最小限にして、ありのままの対象の状態や活動の一側面を測定することがあげられる。特に人間の精神生理に関わる測定において、測定時の制約や影響は、集中の障害、ストレスなどを生じさせて、本来の対象の状態を変化させてしまうことがある。よって、これを最小限に抑えた測定技術の検討は、重要な課題となる。

そこで、新しい可能性の一つとして、ロシアのサンクトペテルブルク大学のKonstantin Korotkov 理学博士(生物物理)が開発したGDV(Gas Discharge Visualization)を挙げられる。GDVとは、ガラス電極上に置かれた測定物(主に生物)から、高周波電磁界によって誘発されるフォトンによる発光現象をCCDカメラで撮影する技術である。人体の測定の場合、主に手の指を使用する。撮影時間が、わずか0.5秒と短く、電極等の身体への装着が必要ないため、撮影時に、被験者はストレスを感じる事がほとんどなく、測定のための特別な環境の設定もほとんど必要ない。この点において、GDVは、他の生理測定機器と比較して、独自性があり、より被験者のありのままの状態を測定できる可能性がある。この技術の原型自体は古く、現象としては、1777年にG.C.Lichtenbergのコロナ放電の形状を記録し

たりヒテンベルグ図、人体の撮影としては、1892年、ロシアのJ.Nardkevitch-Yodkoの人間の手の記録に遡る。この発光は、主に生体の皮膚表面(主に表皮と真皮)の細胞が有する電子を基に生じた気体放電による発光である。健常者の安静時の発光を視覚的に見ると、王冠のような形をした発光となる。

撮影された発光画像は、デジタル化された後に、パソコンに取り込み、発光強度、エントロピー、フラクタル等の発光状態を理解するためのパラメータに数値化することができ、様々な解析、比較が可能となる。GDVの測定データは、心電図、脳波、血流等の従来の生理パラメータとの相関性があり、ストレス測定や心理状態の評価などの精神生理学の分野での活用がなされている。

また、GDVの研究事例として、変性意識状態において、特殊な発光が見られる興味深いデータが報告されている。このことについては、GDVの測定モデルの独自性によるところがあると考えられる。

トランスパーソナル心理学の実証科学的研究において、GDVは、多くの人が具体的に共有することが可能で、学際的、多面的に検証することは、“意識”、“心”という存在についての理解を深めることができる可能性がある。